
機動武道伝 GFate

イクサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動武道伝G F a t e

【Nコード】

N7737N

【作者名】

イクサ

【あらすじ】

冬木の町に熱い武道家達が降り立った。聖杯を目指し戦え、ファイター。

第一話

衛宮切嗣には捨てられなかった物がある。年を食おうと戦場を巡るうと、忘れられなかった物がある。

それは正義を良しとする心。

真正面から正義を肯定し賛美する心。それが切嗣のアイデンティティーだったし、強さになっていた。

切嗣は空港で一人これからの事を考えていた。彼の頭の中にはこれからの戦争を勝ち進むことしかなかった。

機動武道伝 G F a t e 第四次聖杯戦争

『それで、本当なのか？セイバー。お前が異世界または、未来からの英霊だと言っつのは？』

切嗣は己のサーヴァントに頭の中で問う。目下の悩みはこの己のサーヴァントであった。

このサーヴァント、ステータスに理解に苦しむ宝具があるばかりか、自分の知らない年号を聞いてきた。

戦力として換算することに疑問を感じ、計画を練り直したのは、記憶に新しい。

『ああ、間違いない。この文明の度合い、地球の環境、どれも記憶とは違う』

『そうか……』

がつくり、と肩を落とす切嗣。切嗣はその突拍子のない出来事に納得する理由がある。切嗣は自らの雇い主であるアインツベルンが、第三次聖杯戦争時に異世界からのサーヴァント召喚を試みたという情報を、得ていた。大まかにしか教えて貰っていなかったが、何となくわかる。

おそらく、その時の行為が今期の聖杯戦争に何かを残しているのだろう。

切嗣は考えをやめ、セイバーと共に表向きアインツベルン代表として先に送り込んだ、妻アイリスフィールに思いを馳せる。無事でやっているだろうか。

切嗣はポケットに手を入れ、タバコを取りだし、火をつけた。

言峰綺礼は憂鬱だった。彼は天才だった。格闘技も、魔術も直ぐにそつなく理解し、順風な人生を送っているはずだった。綺麗な妻を持ち、子供にも恵まれ、全てを備えている様に見えた。それでも憂鬱な理由は綺礼にもわからない。彼は己の手駒、ランサーに頭で語りかける。

『調子はどうだ。』

直ぐに答えはかえってくる。

『良好だ。問題ない。言われた通り、マスターになりそうな魔術師を消してきたぞ』

『そうか』

綺礼はきたるべき戦争に思いを馳せ、導師へと報告に向かった。

「本当に出るのか？ 雁夜。お主も知っておる通り、今期の聖杯戦争は……」

「わかっています。前回のアインツベルンのルール違反。それによる聖杯の異常。ですが私は参加します」

洋館の一室、若い男と年老いた男が話し込んでいた。老人の顔には深いシワが刻まれており、歩んできた人生の深さを感じさせる。

「お主がそういうならのお。」

「私も一人の魔術師として自分を試してみたいのです」

「止めはせんがの。しかし、我が間桐の悲願忘れておらんか？」

老人が鋭く問いかける。

「勿論です。この世全ての悪の殲滅。それが間桐の悲願。今期の聖杯戦争はお任せ下さい」

冬木の町にある高級ホテルの一室。そこには惨劇が広がっていた。

「先生！ケイネス先生！」

「ウエイバー……」

一人の男がぐったりと倒れている。腹部から大量に出血しており、男が助からない事を示している。その男に必死に少年が話しかけていた。

「先生！確りしてください！何があつたんですか？」

「ランサーが……」

「ランサー？」

「ウエイバー、妻は……？」

「それは……ご無事です」

「そうか……嘘は苦手かな？」

「そ……」

「ウエイバー……逃げろ。うっ」

「先生?!先生エエエ！」

男は息を引き取り、少年は慟哭する。

「許さない……許さないぞランサー！」

少年はキツ、と魔方陣に目を向ける。使われることのないなかつた魔方陣。それは己の師匠と共に行く従者を召喚するはずだった物だ。

「先生……逃げると仰いましたが、僕は、僕のいない間に先生とその妻を殺されて、黙って要られる様な人間じゃありません」

少年は魔方陣を見つめる。覚悟は決まった。

第二話

「何のつもりだアーチャー。こんな倉庫街で」

誰もいない寂れた倉庫街で、間桐雁夜は己のサーヴァントに問いかける。サーヴァント フランスの貴族の様な青年は優雅な立ち振舞いで振り返った。辺りには人払いの結界をはり、神秘の秘匿は完了している。

「こうするためですよ」

そう言うとアーチャーは大きく息を吸った。

「聖杯戦争に参加している、マスターならびにサーヴァントよ！私はアーチャー！そしてそのマスターである。誇りあるファイターなら今すぐ私達の元に来て、戦うのです！」

アーチャーは辺りいつたいに声を通るように、叫んだ。マスターの間桐雁夜は呆然としている。

「な、何のつもりだ……」

声が震えていておぼつかない。このサーヴァントの思考が読めない。

対してアーチャーは清々しい表情でこう答えた。

「勿論正々堂々、聖杯戦争に臨むサーヴァントとして、名乗りを上げたまでです」

「いい的にされるぞ！馬鹿なのか？」

「おっと、口論している暇はなさそうですね」

「馬鹿なのか、実力者なのかわからないな」

先ほどの名乗りを聞いて、切嗣はそう漏らした。

町のマップピングを行っていたら、サーヴァントの気配を感じたので行ってみたら、馬鹿がいた。

「（奴らしいな）」

セイバーは黙して語らない。

「セイバー。様子を見よう。アーチャー達は何を考えているのかわからない」

「乗った奴が来たみたいだぜ」

「何？」

見ると二人の人影がアーチャー達に向かって、歩んでいる。

「どうする？」

「静観しよう。もしかしたら、この機に四人まとめて始末しようとする、第三勢力《介入者》が現れるかもしれないから、それを待つ。」

「わかった」

「聖杯戦争にも面白い奴がいるな」

若い男

桐沢琢磨

は面白そうに口を開いた。

「来た……本当に」

間桐雁夜はようやくショックから立ち直った。が、まだ少しふらふらしている。

「あなたですか……。久しぶりですね。バーサーカーとお見受けしますが？」

そう問われた少女 バーサーカー はニコリ、と笑って答えた。

「その通りよ、久しぶりねアーチャー。」

アーチャーはふ、と微笑むと、いい放った。

「ここに来ていただけたということは、招待を受けていただけたと言う事です？」

「んー、そう言いたいんだけど、マスターが様子見でおさえろって」

「そうだ。バーサーカー、宝具も狂化もなしだ。行けるな？」

「勿論。あと狂化はやめてね」

バーサーカーは拳を握り構えた。

対する間桐雁夜は。

「アーチャー、こつちも様子見で行く。任せたぞ」

「承りました。マスター」

アーチャーも拳を構える。

激闘が始まるうとしていた。

最初はバーサーカーが踏み込んだ。アーチャーと中距離で戦う理由はなく、近距離戦に持ち込もうと言う考えだ。ジグザグにデンプシーロールで距離をつめていくバーサーカー。対してアーチャーはバックステップで、距離を離す。アーチャーである以上、中距離で戦いたい。

「薔薇よ！」

回り込む様に走るバーサーカーは、自らに迫る脅威に気付いた。

薔薇の花びらが弾丸の様はこちらに迫ってくる。

バーサーカーは最小限の目視で見極め、かわしていく。

「やりますね」

「アーチャーもね！」

バーサーカーはなおも迫る薔薇に対し、アクションに出た。

何も無い空に手をかざす。突如空間が揺らぎその手には得物が握られていた。

「ノーベルリボン！」

ノーベルリボン

気合いと共にリボンを横薙ぎに振るう。迫って来た薔薇達は全て消し飛んだ。

「……ならばこれでどうですか？ ローゼスハリケーン！」

ローゼスハリケーン

先ほどとは、比較にならない薔薇の奔流がバーサーカーを襲う。バーサーカーは薔薇に囲まれ見えなくなった。

「（ヤバツ！……あのときセイバーはどう攻略したんだっけ？
そうだ）」

バーサーカーは構えをとると一気に回転し、リボンを振り回した。

「 ノーベルタイフーン！」

ノーベルタイフーン

一瞬で薔薇は全て消失した。

「その技は……セイバーの！」
「もらった！」

ここぞとばかりに間合いをつめるバーサーカー。その二人に飛来する光弾に気づいたのは、琢磨だった。

「危ねえ！」

第三話

ランサーから、正々堂々名乗りをあげてる組が居ると聞かされた、言峰綺礼は混乱した。行動の意味が掴めない。

「導師、どういたしましょう?」

『こちらのブレイカーによれば、アーチャーは純粹に戦いの名乗りを上げただけらしい。』

宝石から答えがかえってくる。

「では、どうしますか?」

『無視しよう。ランサーは待機だ。乗って来るものが現れたら、監視。能力を報告してくれ。佳境に入って仕留められそうなら、仕留めてもいい。ランサーは遠距離は行けたかな?』

「行けたはずです」

綺礼は引き続き、アーチャーを監視する。ほどなく、アーチャーに乗ってくるものが現れた。

「導匠、アーチャーの誘いに一組答えました」

『ほう。クラスは?』

「バーサーカーと名乗っています」

『バーサーカーか引き続き監視を』

「了解しました」

綺礼は監視を続ける。ほどなく、双方得物を用い出した。

「導師。双方得物を出しました」

『物は』？

「薔薇とリボンです」

『薔薇にリボン？今回のサーヴァントは変わっているな』

遠坂はそう言うが、綺礼のサーヴァントである、ランサーの得物も少々変わっていた。

「 待ってください。戦局が動きました。バーサーカーが踏み込みます」

『よし、ランサーを動かせ』

「わかりました。……ランサー行けるな？」

『ああ。魔力を貰うぞ』

「ああ、構わん」

倉庫街の近くでアーチャー達を監視していたランサーに、攻撃命令が下された。ランサーの両手に気が集まっていく。

「 ちやうどきゅうはおつにちりんたん
超級霸王日輪弾！」

超 級 霸 王 日 輪 弾

ランサーの両手から輝く気が放出される。驚異的な熱をもったそれは、一直線にアーチャーとバーサーカーを襲うはずだった。

セイバーがピクリ、と反応した。

「切嗣。介入者が動いたぞ！」

「何、どつちだ！」

セイバーはあちらと指差した先は、光輝いている。

「人の喧嘩にいいい、手を出すなああつ！」

「セイバー？」

セイバーの右手が光輝いた。

「俺のこの手が光って唸る！お前を倒せと輝き叫ぶ！

必

殺・シャイニングフィンガー！」

必 殺 ・ シ ャ イ ニ ン グ フ ィ ン ガ ー

セイバーの右手から青く輝く火球が発生し、真っ向から介入者の放った光弾に進んでいく。

「アーチャー達を助けたのか？」

「人の喧嘩に水をさす奴が許せないだけさ」

サーヴァントの性格を見極めてなかったと、切嗣が反省している頃、セイバーの放った火球は、ランサーの光弾とかち合い、周囲を照らしながら相殺した。

「今のは……？」

アーチャーが呆然と呟いた。自分達を光弾が襲ったと思ったら、別の光弾がこれを防いだ。辺りはまだ光輝いている。

「今のは……もしかして」

「セイバーです」

琢磨と雁夜の両マスターはまだ呆然としている。

「帰ろっか！」

「確かに興が殺がれました。」

ようやく意識の覚醒したマスター達は相手に問いかける。

「うちのバーサーカーはああ言ってるぜ？」

「良いだろう。私もこれ以上やる気はない」

場の空気は弛緩していった。

「そうか。帰るぞバーサーカー。兄ちゃん、またやるうや。」

「ああ。次は勝たせてもらうぞ。」

そうして四人は後にした。

「攻撃を弾かれただど!?!」
『第四勢力の介入か。予想外だな。ランサーを下がらせる』
「やっています……が、追いつかれた?」

「見つけたぜ!」

人の喧嘩に水をさした不遜な介入者にセイバーはいい放った。

「舐めた真似しやがって、覚悟は出来てるな?」
「マスターの命令だ。武道家として思うところはあれど是非はな
い」

「マスターの命令なら何でもするのか! お前にガンダム
ファイトを申し込む!」

「良いだろう、受けてたつ!」
『ランサー?!』

綺礼が焦った声で問いかけてくる。

「どのみち、こいつをまくのは不可能。ならばここで痛め付け、
撤退する!」

「マスター、宝具を使うぞ!」

『何?わかった。抜かるなよ、セイバー』

「ガンダムファイト、レディイイ・ゴオオオオ」

第四話

「 出るおおお！シャイニングガンダアアム！」

セイバーの右手の紋章が光輝き、セイバーを飲み込み球体を形成。光の玉は宙に浮かび、輝きと共に機械の巨人を降臨させた。

シャイニングガンダム

ガンダム。それは、彼らが呼び出された世界の時代から60年前に、汚れきった地球を後に、宇宙へと登った人々が、コロニー国家間の全面戦争を避けるため、四年に一度、それぞれの代表選手を、闘って、闘って、闘いあわせる代理戦争　ガンダムファイトで、最後まで勝ち残ったガンダムの国が、コロニー国家連合の主導権を手にする事ができると言う行事に、用いられたマシン。

「 来い、ガンダム」

ランサーも同様に自身を光球化し、鋼鉄の巨人を降臨させる。

ヤマトガンダム

「行くぞ！」

シャイニングガンダムは右手から光弾　シャイニングシヨ

ット　を放つ。

ステップを踏み、回避するヤマトガンダム。

「バルカンッ！」

シャイニングガンダムは肩のマシンキャノンを放った。
だが、全て避けられた。

「（やはり、バルカンは効かない）」

「お前に私が何故ランサーなのかを教えてやろう！はあっ！」

ヤマトガンダムの右腕から鞭のような物が放たれる。

間一髪、それをかわしたシャイニングガンダムのセイバーは驚愕に包まれていた。

「布槍術だと！？」

ランサーが用いた布槍術。

それは似すぎている。ある人物が振るう技と。

「（師匠以外にも布槍術を？）」

「（避けられたか）やるな。布槍術と立ち会つのは初めてじゃないな？」

「ああ。……お前程のファイターが居るとはな。どこのガンダムだ？」

セイバーが問いかける。

「私はネオジャパンのガンダム。ネオジャパンのヤマトガンダムだ」

「ネオジャパン？ネオジャパンは俺だ。第13回ガンダムファイトネオジャパン代表、シャイニングガンダム！」

「第13回だと？今は第7回じゃないのか？」

「何？」

ランサーの言葉に驚く、セイバー。だが、直ぐに思考を切り替える。

「（惑わされるな。今はファイトに集中するだけ）どうでもいいが、行くぞ！」

「（今は考えるべき時ではない）来い！」

「お前にセイバーの真髄を見せてやる！はああああ……」

セイバーは精神を集中していく。わだかまりや、やましさを捨てた、清んだ心。持ち得る力を全て引き出す。明鏡止水の境地。セイバーモード

明鏡止水

シャイニングガンダムの腕部アームカバーが点火。カバーが解放。次いで肩のエネルギーフィールドジェネレーターが展開。足部レックカバーを解放し、シユートブラスターを展開。

頭部のフェイスカバー、頭頂部のフィールドリダクションフィン及び側面のリトラクタブルタクトが展開し、頭部の冷却を開始。そして、全身が黄金の輝きに包まれる。

シャイニングガンダム・スーパーモード

「これは……明鏡止水の境地？」

黄金の輝きを見せるシャイニングガンダムに驚きを隠せない、ランサー。

セイバーはビームサーベルを抜き、シャイニングフィンガーのエ

ネルギーを集中させていく。

「シャイニングフィンガーソード！」

シャイニングフィンガーソード

シャイニングガンダムの構えるビームサーベルはその長さを増やし、通常時の三倍程に長くなっている。

「何て長さだ……！」

驚愕に包まれるランサー。セイバーは宣誓するようにいい放つ。

「行くぞ。ランサー」

「良いだろう」

ランサーのヤマトガンダムのコクピットが金色の光に包まれていく。

明鏡止水

「なつ、お前もスーパーモードを？」

「ああ、機体には反映されないがな」

ヤマトガンダムはビームクロスを構える。

シャイニングガンダムはシャイニングフィンガーソードを大きく振りかぶった。

「面！」

容赦のない斬撃がヤマトガンダムを襲う。ヤマトガンダムはビームクロスを斜め横に薙ぐことで迎撃した。

拮抗する両者の攻撃。

そして、両者の獲物は弾かれ、お互いにのけぞった。

「く…… 必殺・シャイニングフィンガー！」

必殺・シャイニングフィンガー

「己…… 灼熱・サンシャインフィンガー！」

灼熱・サンシャインフィンガー

光輝く手同士がががち合い、拮抗する。

両者は互角だった。

その結果。

「グワァ！」

「くっ！」

両者の右腕は崩壊した。

直ぐにマスターから魔力をすいとり再生に当てる。

「ふ……やるな」

「お前もな。セイバー」

拳を交えた武道家同士の相手を尊敬する心。武道家独特のそれが生まれ、場の空気が弛緩していった。

『セイバー、ここまでだ』
「マスター？」

頭に切嗣の音が響く。

『魔力を使いすぎた』

「くっ」

『撤退だランサー』

「ふむ」

魔力切れはランサーのマスター、綺礼も同様だった。

「今日はここまでだ。いいファイトだったぜ」

「ああ、素晴らしいファイトだった。ではさらばだ」

ガンダムを消して去っていくランサー。ランサーを見送るセイバーの視線は好敵手が生まれたことの喜びで満ちていた。

第五話

ウェイバー・ベルベツトは憂鬱だった。

アサシンを何度か情報探索に出した物の、結果は芳しくない。

先生 ケイネス・エルメロイ・アーチボルド と、

その妻、ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリの仇、ランサーとそのマスターに復讐の鉄槌を下す事がウェイバーの目的だ。

だがランサー陣営の情報秘匿が巧妙なのか、今一つ情報が手に入らない。

「そう気を急くな。マスター。心配せずとも、この聖杯戦争。いずれランサーともぶつかろう。今、気を揉む必要はない」

隣の老人 アサシンの変装した姿 が、口を開く。

アサシンは変装しなければ目立ちすぎるため、ウェイバーの進言で変装した。する前は軍服を着た覆面の青年である。

「それはわかってるさ、アサシン」

「それに復讐にこだわる男を見てきたが、頭に血を昇らせるのは良くない。君に責任はないんだろう？」

「そんな風に割りきれないよ！先生達は僕が買物にいつてる間に死んだんだぞ！」

ホテルに荷物を置いた後、ソラウは日本のどら焼きを食べたがった。色々と雑用をさせたウェイバーを気遣って、気分転換も兼ねてと、ケイネスが外に出した。

結果、これがウェイバーの命を救ったことになる。

「（まるで昔の弟だな）」

アサシンは頭に血が昇っていた頃の弟を思い出す。復讐に駆られて旅を続け、荒んでいた頃の弟を。

「なにせよ、マスターはまだ若い。色々と道があるんじゃないか？」

「だけど……」

ウェイバーは未だ割りきれぬ気になれなかった。

「聖杯戦争のサーヴァントのシステムについて聞きたい？」

ランサーと手合わせした後の帰り道。セイバーの質問に切嗣は振り返った。

「ああ。俺とやったランサー。あいつは妙な事を言っていた。もしかしたらあいつは俺の世界の過去の存在かもしれない」

「……あり得なくはないな」

セイバーが反応する。

「サーヴァントは時系列に関係なく英霊を呼び寄せる。セイバーの世界の過去のファイターが呼び出されても不思議じゃない」

切嗣は丁寧に答える。

「そうなのか……」

セイバーは得心したと言う顔をしていた。

「時系列がおかしいだど？」

誰もいない部屋で綺礼は一人呟いた。

『ああ、あいつ、セイバーは明らかに俺の世界の未来から来た英霊だった。だがそんな事があるのか？』

「無くはない」

綺礼は静かに呟いた。

「サーヴァントは過去未来関係なく呼び出される。お前の世界の未来の英霊がいても不思議ではない。更に別人に近いと解釈されれば同一人物が呼ばれることもある」

『そうなのか』

頭から響く声に疑問の色はなかった。

ウェイバーの気分は相変わらず優れなかった。街を歩く足取りも何処か重い。

「ん？」

「どうしたんだ、アサシン」

「近くでサーヴァントが戦っている。あちらの倉庫街方面だ。」

「……………」
「行ってみるか？」

ウェイバーは悩んだ。サーヴァントの実力と言うものを自分は知らない。どれ程の物か、この目で見てみたいと言っ気持ちはあった。

「わかった。行こう。だが見るだけだぞ」

そうしてウェイバー達は進んでいった。人払いの結界を無視し、進んで、遂にたどり着いた。

それは圧巻だった。金色に輝く機械の巨人と、もう一機の機械の巨人が鏝迫り合いをしていた。一方は剣。もう一方は鞭の様な物でかち合っている。

「……………あれはシャイニングガンダム！もう一方は、何処のガンダムだ？」

「ガンダム？」

「あの巨人達の事だ。」

「……………そうか」

アサシンの宝具も何かしらのガンダムなのだろうか。そうウェイバーが考えているとき、声が響いた。

「……………お主らも、見物か？」

第六話

「……なんのことです？」

ウェイバーが答える。

「とぼけるでない。人払いの結界があるのにおる人間等、マスター以外に考えられぬわ」

「貴様」

アサシンが変装を解いた。

「参加していたのか！クラスはライダーか？」

「ふっ、久しいなアサシン。ランタオ島以来か？そう、わしのクラスはライダーよ」

「貴様！また何か企んでいるのか！」

アサシンは中華風の服を来た老人、ライダーに向かい、声を荒げた。

「そう急ぐでない。わしもお主が死んだ後、色々あったのだ。

まさか弟子に悟されるとはな。人生わからぬ物よ」

「何も企んではないのだな」

「そうじゃ。今のわしはただのサーヴァント。第四期のライダーに過ぎぬ。」

「……今はその言葉信じておこつ」

アサシンは引き下がった。

「何だ二人は知り合いなのか？」

ウェイバーが問いかける。

「それは僕も知りたいですね」

物陰から一人の男が現れた。まだ若い、青年の域の男だ。その目は真っ直ぐにライダーを見つめている。

「ライダーのマスターか！」

「何、わしにも悪党をやっておった時代があつてな。それを奴等に正されたのよ」

「……深くは聞かないでおきましょう」

ライダーのマスター、金沢勇二はウェイバーに向き直った。

「さて、聖杯戦争のマスターが向き合った訳ですが、やることは一つですね？」

「待つてくれ僕はやる気はない！聖杯にも興味ないんだ！」

「ん？どういうことですか？」

「あんた知らないか？ランサーの事を。僕はランサーを倒したいんだ！」

「小僧、事情を言ってみろ」

「ライダー」

「何、いたずらに戦うだけが聖杯戦争にあらず。もしかしたら利害が一致するかもしれん」

ライダーが口を開く。

「僕は、先生達の仇を打ちたいんだ！先生は僕が買物に行つて

るときに殺された。だから仇を打ちたいんだよ！」

「小僧、復讐をしたいのか」

ライダーが静かに問う。

「悪いか？」

「怨恨で戦い始める者は多い。だが怨恨で戦い続ける者はあつてはならぬ。お主の師はお主に復讐を望んだか？」

「それは……」

「似てますね。僕と。」

「え？」

「僕もある人物を追っているんですよ。」

「……誰を？」

「衛宮切嗣。セイバーのマスターです。」

金沢は静かに口を開いた。

「衛宮は仕事である魔術師を殺すために、船を一隻落とした。なんの関係もない人間が、衛宮のやり口のせいでも300人死んだ。その中に僕の妹も居たんですよ。」

「魔術師一人のために船一隻……」

ウェイバーは戦慄した。

「僕達手を組みませんか？僕は衛宮を。君はランサーを殺すために。お互い利害は一致しているはずですよ。」

「僕は……」

「マスター」

「何です？ライダー？」

「手を組むのは構わんが、アサシンはともかく、そのマスターは

いささか未熟に見える」

「つまり？」

「実力を計るために、軽く手合わせしたいが構わぬか？」

「構いませんが。君は？」

「僕は構わない」

先生の仇を打つのに、こんな所で怯えている訳には行かない。

「私は構わん。」

「ならば……」

「「ガンダムファイト、レディィィ・ゴオオオオ！」」

第七話

「出るオオオオ！ガンダアアアム！」

アサシンが雄叫びをあげる。

それに呼応するようにアサシンが光輝き、球体化。空中に浮かび、光と共に、機械の巨人を出現させた。

ガンダム シュピーゲル

「来い！ガンダム」

ライダーも雄叫びをあげ、右手の紋章が発光。球体を形成。宙に浮かび機械の巨人を降臨させた。

クーロンガンダム

ガンダムシュピーゲルが先に仕掛けた。

「かわせるか！」

両手をつきだし、アイアンネットを放つ。

クーロンガンダムは右手から布を放つことによつてそれを捌いた。

布槍術。

ランサーより年季の入ったそれは、ウェイバーを震撼させた。

「これならどうだ！」

ガンダムシュピーゲルは手のシュピーゲルブレードを振りかぶり

斬りかかるうとする。

「たわけ！見え見えよ！」

クーロンガンダムは布を放つ。

その布はガンダムシュピーゲルのコクピットを貫くかに見えた。

「馬鹿め！」

「何?!」

布がコクピットを貫く瞬間、ガンダムシュピーゲルは三体に分身した。布は虚空を貫く。

「せいや！」

シュピーゲルブレードで、クーロンガンダムの胴体を切りつける。

「ぐお！こやつ、分身か！」

「その程度かライダー！」

ガンダムシュピーゲルがもう一度仕掛ける。クーロンガンダムは対応するも分身に翻弄される。

懐に入る事に成功したガンダムシュピーゲルは、百烈脚を浴びせる。

「そらそら、どうした！どうした！どうした！どうしたあ！」

蹴り飛ばされ、後ろに大きく引き下がるクーロンガンダム。

「ここらで引導を渡してくれるわ！」

ここぞとばかりに、攻めかけるガンダムシュピーゲル。

「アホが、三度も同じ手が通用するか！」

クーロンガンダムは右手をかざす。

「三体になるなら、三体とも吹き飛ばすまでのことよ！
クーロンフィンガー！」

クーロンフィンガー

クーロンガンダムの右手から衝撃波が放たれる。それは全ての分身をかきつけた。

「そこじゃあっ！」

「ぬぐー！」

放たれた布をシュピーゲルブレードで防ぐガンダムシュピーゲル。しばし拮抗した。

「そこまで！」

金沢勇二の声が響き渡る。

「ふっ、ここまでか……」

クーロンガンダムがその姿を消失させる。

「いいファイトだった」

ガンダムシユピーゲルも同様に消失させる。

「……アサシン」

ウェイバーは呟く。

「見せてもらったよ。君のアサシンの力。パートナーとしては十分だ」

「あ……ああ」

「僕の名前は金沢勇二。これからよろしく」

「僕はウェイバー・ベルベット。よろしく」

ウェイバーは戦慄していた。アサシンの実力もさることながら、ライダーだ。本気を出した様子も見えないし、何より騎乗していない。

「ついて来てくれ。僕のアジトに案内しよう」

「貴様と組むことになるとはな」

「全くじゃ、何が起こるかわからないのう」

「アイリ？」

聖杯戦争の初戦を終え、帰宅した切嗣は、己の妻の名を呼んだ。だが返事がかえってこない。

「アイリー？寝てるのかい？」

尚も妻の名を呼び続ける切嗣。アジトの部屋を一通り見たあと、庭を見た。

そこには切嗣の妻のアイリが立っていた。

「アイリ」

「待て」

セイバーが駆け寄ろうとした、切嗣を止めた。

「何て魔力量だ。切嗣、お前は気付かないのか？」

切嗣はアイリを注意深く観察する。

何だこの魔力量は？

「アイ……」

「危ない！」

瞬間、アイリの体が光に包まれた。アイリを包んだ光の球体はどんどん上昇し、そして輝きと共に悪意を産み出した。

デビルガンダムを。

「何だあれは？」

「デビルガンダム！」

第八話

デビルガンダム出現。その事実にはセイバーの胸を打った。

「アイリ！アイリ！」

叫ぶ切嗣をどうにか押さえ込む。

アイリの反応がない。完全にデビルガンダムの生体ユニットとさ
れてしまったのだろうか。

獣のような四つ足の下半身に、人型の上半身。
デビルガンダムは完全にその姿を現した。

「逃げるぞ、切嗣！」

「アイリを置いてか!？」

「お前まで取り込まれるぞ！」

切嗣は顔を苦しみに染めながら口を開いた。

「撤退するぞ、セイバー」

「あゝ」

ウェイバーは金沢について歩いて歩いていた。廃工場にアジトを構えて
ると言う、金沢の後を歩いて、もう20分になる。

「なあ、ちょっと休憩しないか？」

「疲れたかい？」

アサシンに魔力を持っていかれた後での歩行は堪える。

「うん、少し」

ウェイバーは素直にそれを認めた。

「わかった。ちょっと休憩しよう。」

霊体化した二人のサーヴァントを従え、二人は喫茶店に入った。それぞれ、紅茶とコーヒーを注文する。

最初に異変を感じ取ったのは、ライダーだった。

『マスター。人払いの結界を』

『何か来るのかい？』

『うむ。紋章が反応しておる』

「ウェイバー君。来客のようだ」

金沢は人払いの結界をはって行く。

そして、それは現れた。

それは人にガンダムヘッドと呼ばれていた。

『わしが行く。良いな？』

「うん」

ライダーが実体化する。

己を光球化しクーロンガンダムを出現させる。

クーロンガンダム

「
酔舞・再現江湖テッドリーウェイブ

！」

ブ 酔 舞 ・ 再 現 江 湖 デ ッ ド リ ー ウ ェ イ

クーロンガンダムがポーズをとった後、突進。ガンダムヘッドを貫通しポーズを決める。

「爆発！」

爆音と共にガンダムヘッドは崩壊した。

「しかし、ガンダムヘッドとは……まさかデビルガンダムが？」

「つまり聖杯が暴走したと？」

夕暮れの教会で言峰璃正は口を開いた。

「そういうことです。聖杯はデビルガンダムとして覚醒し、僕の妻アイリを生体ユニットとして取り込みました」

「そんな……」

「あなたは前回のアインツベルンのサーヴァントの事は？」

「前ランサーの事ですか？変わったサーヴァントでした。旗を武器にしていた筈ですが」

「前回のアインツベルンはサーヴァントを異世界から召喚しました。それが今回に影響しているのでしょうか」

「あなたはどこまでご存じでした？」

「雇い主から聞かされたのは、何かが起こるかもしれないぐらい

で、こうなるとは」

「ふむ……」

「聖杯は願望機としての能力はなくしました。セイバーによればデビルガンダムは大変危険な代物です。直ぐにマスターに召集をかけるべきです」

「わかりました」

間桐雁夜は自室で物思いに耽っていた。目下の悩みは如何にアーチャーと協力して聖杯戦争を勝ち抜いていくかだ。

だが問題がある。アーチャーの性格だ。

「騎士道か……」

アーチャーである以上、遠距離からの闇討ち等を要求したい所だが、あの性格では絶対に聞かないだろう。どうしたものかと頭をひねった。

コンコン、とノックがある。

「どうぞ」

「失礼します、マスター」

「どうした？」

「マスターには私と共に出立していただきたいのですが」

「何かあったのか？」

アーチャーは黙って右手を差し出す。

紋章が光っている。

「これは？」

「何か良くない事が起こっている証です」

その紋章 アーチャーに聞いた話によれば、ジャックイン
ダイヤと言っらしい それは彼の世界で秩序の守護者達五人
に代々受け継がれる物らしい。善と、格闘技のの象徴だと言っ。

雁夜はアーチャーを見据えた。

「証拠は？」

「ありません。勘のような物です」

勘か、と雁夜は思った。このサーヴァントはなんとかならないも
のか。

暫し考える雁夜。

今さら何を悩む事がある。聖杯戦争に参加すると決めた時から、
腹はくくった筈だ。今さら勘が何だ。

「よし、行こっ」

第九話

ウェイバーはライダーがガンダムヘッドを追い払った後、思案に暮れていた。

先ほどのあれは何だ？

ライダーの言っていたデビルガンダムとは？

「ライダー今期の聖杯戦争、少々毛色が違うようだ。まずデビルガンダムとやらについて説明してもらおう」

金沢が口を開く。

「それについては私が説明しよう」

アサシンが口を開いた。

「デビルガンダムは元々私達の世界で地球の環境を浄化するため開発されたガンダムだ。だがとある人物達の陰謀に巻き込まれ、暴走。人類を地球に悪影響を与える存在と認識し、破壊して回っていた。デビルガンダム細胞を撒き散らし手下を増やし、再生し進化する」

「詳しいな」

「……デビルガンダムを作ったのは私と父だ」

なんと、とウェイバーが声を荒げる。

「……陰謀に巻き込まれたとはどういったことだい？」

「……デビルガンダムの力、そして父の才能を妬む者達の陰謀にあったのだ。今はそれしか言えん」

「どういっ……」

「なるほど。君に悪意はないと言う事はわかった。今はここまでにしておこう」

ウェイバーが目線で良いのか？、と問いかける。

金沢が仕草で納得しろと促した。

「ウェイバーよ」

「何だアサシン？」

「私の弟もデビルガンダムの陰謀で利用された。その復讐心をな……今一度考え直せ」

頭に先生の笑顔が浮かぶ。

「考えさせてくれ……」

桐沢琢磨は暇だった。武者修行を兼ねて参加した聖杯戦争だが、初戦以降、面白い事がない。

「マスター」

霊体化していた、バーサーカーが実体化し、話しかける。

「何だ？」

「ヤバイわ。囲まれてる」

瞬時に琢磨の意識は覚醒した。

囲まれている？

こんな街中で結界も張らず、仕掛けてくる??どこのバカだ?

「マスター、宝具を!」

「ああ!」

「来て!ガンダム!」

ノーベルガンダム

空を一つの影が舞った。

鳥のような形をしたガンダムが飛翔している。

天劍絶刀

空を舞うガンダム

ガンダムベブンスソード

が変

形した。

ガンダムベブンスソードが足を振るう。ノーベルガンダムへ向けて衝撃波が発生した。

虹色の足

「ノーベルフラフープ!」

ノーベルフラフープ

放たれた衝撃波とフラフープがかち合い、辺りを閃光が包む。突如、横から殴られ、ノーベルガンダムは吹き飛んだ。

「何だ?このデカブツ」

獅王争覇

ノーベルガンダムを横から殴り付けたグランドガンダムは、ノーベルを見つめ静かに佇んでいる。

そしてもう一体。

恐ろしい口の形をしたガンダムがこちらをねめつけている。

笑 傲 江 湖

「これは……ここまでか？」

琢磨が呟いたのと、ガンダム達を薔薇が包んだのは同じだった。

「お前の勘も中々だな、アーチャー」

バーサーカーを囲んでいるガンダム達は何かおかしい。自分の見
ていない、キャスター、ライダー、アサシンと数は一致するが、特
徴は合わない。琢磨に事情を聞いた方が良さそうだ。

「彼女を助けます。」

ローゼスハリケーン！

ローゼスハリケーン

ノーベルガンダムを囲んだ三体のガンダムを薔薇が包んむ。

「……これは 間桐雁夜！」

「ご託は無しだ。ここは協力だ」

「来なさい。ガンダム！」

ガンダムローズ

ガンダムが降臨した。

「行け！ローゼスビット！」

ガンダムローズから小型の砲台、ローゼスビットが射出される。
ガンダム達の動きが目に見えて鈍った。

「助かった。バーサーカー！」

「何？」

「狂化だ！」

「え？」

「それしかねえ！」

「わかったわ」

ノーベルガンダムは体制を立て直す。

「バーサーカーが隙を作る。その隙に離脱だ！ガンダムで回収し
てくれ！」

「わかった！アーチャー！」

「わかりました」

琢磨の令呪が光輝く。

「狂え！バーサーカー！」

第十話

セーラー服を着た、長髪の女性の様な姿のノーベルガンダムに変化が訪れた。

後頭部に装備された放熱フィンが展開。
全身がピンク色に輝いている。

「テキハドコダアアアッ！」

バーサーカーが狂う。

球体の姿をした恐ろしい口のガンダム　　ウォルターガンダム
ム　　が変形する。変形し、三足になったウォルターガンダム
はゆっくりとノーベルガンダムに近づいてくる。

グランドガンダムは自らの角から、自己生成した砲弾を撒き散らし、弾幕を展開する。

ジグザグに走り、グランドガンダムに近づいて行くノーベルガンダム。

懐に潜り込み、強烈なストレートパンチを見舞う。
のけぞるグランドガンダム。

「今です！　　ローゼスハリケーン！」

ローゼスハリケーン

「狂化を解除だ」

「乗ってください！」

ガンダムローズは右手を雁夜と琢磨に差し出す。

二人はガンダムローズの右手に乗り、衝撃に備えた。

「飛ばします!」
「了解!」

ガンダムローズとノーベルガンダムは戦場を後にした。
それを見送ったガンダム三機は何処かへと去っていった。

「街中で戦闘しているサーヴァントがいる?」

切嗣と話していた璃正に残念なニュースがもたらせる。

「結界も張らないのですか?」

切嗣が訪ねる。

「どうもその様です。マスターは?」

「五体のサーヴァントの内、三体は不明、二体は間桐雁夜と桐沢
琢磨です」

教会スタッフは答える。

「その二名に収集をかけましょう。事情いかんによっては、全マ
スターに討伐指令を出します」

程なくして雁夜と琢磨がやってくる。

「さて、何が起こったのか事情を聞きましょう」

「私は苦戦している桐沢達を見つけて、助勢しただけです」

「どうもこうも街中でいきなり仕掛けられたんだよ！死ぬかと思っただぜ」

「街中でいきなり？」

璃正は考え込む。

「とにかく、もう一方の話を聞きたいですね。」

「恐らくそれは出来ないと思います」

「何故ですか？間桐さん」

「あいつらからまともなサーヴァントの気配を感じませんでした。」

「それは私もです」

アーチャーが口を挟む。

「加えてあのガンダムは、デビルガンダムの僕。平たく言えば人類の敵です。」

「奴らが現れたのか？」

声のした方にアーチャーとバーサーカーが目を向ける。

「あなたは……」

「セイバー！」

セイバーと切嗣が立っていた。

「何故、セイバーとマスターがここに？」

「それは追って説明します」

「……」

「まず、言峰璃正名義で全マスターに収集をかけます」

ウェイバーはようやくかと安堵した。

更に二十分歩いてようやく、金沢のアジトである廃工場にたどり着いた。

「疲れたか？小僧？」

「少しだけな。あと、小僧って言うなライダー。僕はウェイバー・ベルベットだ」

「はっ、元気が良いな。して、ウェイバーよ。復讐に拘っておるようだが、今もか？」

「ライダーもアサシンみたいな事言うのか？」

「あやつがどうした？」

「頭に血が昇って利用された男を見てきたって。」

「わしも見てきたぞ、そやつはわしの弟子だからな」

「ライダーの？」

「ああ。あやつもセイバー辺りで現界しておるだろうよ」

「セイバー……」

「ウェイバー。復讐等やめておけ。己を傷つけるだけだ」

「わかつてるよ……」

先生の事を思い出す。

才能の乏しかった自分を目にかけてくれた先生。

自分の論文を面白いと言ってくれた先生。

最後まで自分を案じてくれた先生。

先生に報いる手段は何だろうか？

復讐のみなのだろうか？

一方で、別の感情もある。アサシンとライダーの戦いに魔術師として鳥肌がたった。すごいと思った。もっと見てみたいとも。

ウェイバーの中で何かが吹っ切れた。

「アサシン、ライダー」

「何だ？」

「僕は戦う。復讐とかじゃなくて、僕自身の魔術師としての意思で！」

「ああ、それがいい」

第十一話

自室でくつろいでいた遠坂時臣の目に、変わった物が入った。

花火。教会から花火が出ている。

「マスターの収集令？何が……」

時臣は自室を後にした。

ウェイバーと金沢は揃って空を見上げていた。

「……あれは」

「マスターの収集令！」

二人はサーヴァントを従え歩いて行った。

「マスターの収集令……父上？」

綺礼は窓を覗いている。

「何があつた？」

ランサーが話しかける。

「なに……マスターは全員教会に集まらねばならぬ様だ」

二人は歩き出した。

切嗣は考えていた。聖杯の願望機としての能力は失われた。あるいはデビルガンダムを打倒すれば、その能力は蘇るかもしれない。だが今は失われている。

もし、失われたのなら自分はどうすればいい？世界の恒久的な平和を願うつもりが、聖杯を破壊しなければならなくなった。かなわないのか？アイリが素敵だと言ってくれた夢は。

アイリ。

今は失われた伴侶の事を思い出す。自分はアイリを助けない。何を犠牲にしても。

切嗣は大を犠牲にしても助けない小に、たどり着こうとしていた。ウェイバーは不安そうに辺りを見回した。全マスターとサーヴァントの揃った図はさすがに心に来るものがある。

「さて全員揃いましたね。今回、皆さんに集まってもらったのは、今回の聖杯の運び手、ひいては聖杯がデビルガンダムという存在に変化したことです。恐らく願望機としての機能を喪失しています」

「な？」

「デビルガンダムが？」

辺りがざわつく。

「それは本当なのか？」

アサシンが質問する。

「本当だ」

口を開いたのはセイバーだった。

「俺と切嗣は確かに見た。デビルガンダムが出現する様をな」

「セイバー……」

「久しぶりだな。アサシン。それに……師匠……」

ウェイバーは考える。デビルガンダム？アサシンの言っていたあれか？自分達を襲った、ガンダムヘッドとライダーの言っていたあれも関係あるのか？

それもそうだが、願望機としての機能が無い？自分とはともかく、聖杯戦争が根底から覆る事態だ。

「すまないが」

近くにいた魔術師

遠坂時臣

が口を開く。

「デビルガンダムとは何か、説明してくれないかね？」

「俺が説明しよう。デビルガンダムは元々俺達の世界で地球を浄化するために作られたガンダムだ。だが、陰謀に巻き込まれ、暴走。人類を地球に悪影響を与える存在と認識し、破壊して回るようになった。デビルガンダム細胞を撒き散らし手下を増やし、再生し、進化する」

セイバーが説明する。

話を聞く限りとんでもない代物だ。
だが……

「何故そんなものが出現した？」

言峰綺礼が問いかける。

「……それについては……」
「衛宮切嗣……」

金沢が呟く。

「僕が説明しよう。前回のアインツベルンのルール違反を」

「ルール違反？」

遠坂時臣が呟く。

「前回のアインツベルンはルール違反を犯し、サーヴァントを異世界から召喚しようとした。その結果、歪に異世界とこの世界が繋がり、今日の事態を招いた」

「お前、こうなるって知ってたのかよ！」

ウェイバーは思わず叫んだ。

「嫌……僕らに聞かされていたのは何かが起こる位だ」

切嗣が言い終わった時、言峰璃正が口を開く。

「監督役として正式にデビルガンダム討伐を命令します」

間桐雁夜はため息をついた。何かが起こると思ったなら、こうなっただか。今期の聖杯戦争はやはり捨てだなど、大きく息を吐いた。

「では、一連の事態に最も詳しいであろう、衛宮切嗣とセイバーをリーダーにデビルガンダム討伐に当たって貰います」

「彼をリーダーに？」

遠坂時臣が疑問を投げ掛ける。

「良いじゃないか、時臣」

「雁夜」

「彼は恐らく、一番事情に詳しい。それに最優のサーヴァント、セイバーを召喚したんだ。充分さ」

雁夜はそう語った。

「お前がそう言うなら……」

時臣は引き下がった。

「私はある人物に連絡があるので失礼する」

言峰璃正はそう言って退出していった。

第十二話

「所で、デビルガンダムの居場所は分かっているのかい？」

切嗣はそばにいた、聖堂教会のスタッフに尋ねた。

「はい。現在使い魔を放ち、探しております。」

「失礼します」

別の教会スタッフが現れた。

「デビルガンダムの居場所が分かりました。柳桐寺です。」

ウェイバーは金沢が衛宮切嗣のもとに行くのを黙って見ていた。

「衛宮切嗣」

「なんだい？君はライダーのマスターの……」

「金沢勇二だ。衛宮、このゴタゴタが終わったら僕と戦え。」

「こんなとき……」

「僕の妹はお前の仕事に巻き込まれて殺された」

「……」

「僕と……戦え」

「ああ……わかった」

「所で、遠坂時臣」

「遠坂でかまわないよ」

「では遠坂。皆は一度は宝具
いる。君を除いて」

ガンダム

を晒して

「何が言いたい？」

「力を試させてくれないか？軽くで良い」

「導師に無礼なこ……」

「かまわないよ、綺礼。彼の言い分は最もだ。ブレイカー」

虚空から一人の大男が現れる。

「セイバーのマスターが君の力を試したいそうだが？」

「……良いだろう。受けてたつ」

セイバーも現れ、身構える。

「お前とやるのも久しぶりだな」

「そうだな、セイバー」

「ガンダムファイト。レディイイ・ゴオオオ！」

セイバーが雄叫びをあげる。

「出るオオオオ！シャイニングガンダアアアム！」

パチリ、と指を鳴らす音が辺りに響き渡る。

機械の巨人が降臨した。

シャイニングガンダム

「来い！ガンダアアアム！」

光と共に黒いガンダムが現れる。

ボルトガンダム

ガンダムを出した両者は、身構えた。

「行くぞ！」

シャイニングガンダムが仕掛ける。

驚異的なスピードでボルトガンダムに突っ込んでいく。

ボルトガンダムは左肩から、グラビトン・ハンマーを射出。胸部からビームグリップを取り出し接続した。

「はあっ！」

ボルトガンダムはグラビトン・ハンマーを一直線に放つ。

シャイニングガンダムに当たるかと思われたハンマーは、虚空を貫いた。

シャイニングガンダムは回り込む様にボルトガンダムの懐に入っていく。ハンマーが延びきっているため、ボルトガンダムは攻撃できな

「はあっ！」

シャイニングガンダムの強烈な肘うちがヒットする。そこからさらに正拳突きへと、繋げるシャイニングガンダム。止めに足払いを放ち、ボルトガンダムは転倒する筈だった。

金属がぶつかった様な音を立ててシャイニングガンダムの足払いが止まる。

シャイニングガンダムの足払いはボルトガンダムの剛脚に阻まれ

ていた。

「なに？」

「どうした？その程度か？セイバー」

ボルトガンダムの強烈なボディブローが、シャイニングガンダムの右脇腹にヒットする。

「ぐわあああっ！」

シャイニングガンダムは大きく吹き飛ばす。

「セイバー！」

切嗣が叫びをあげる。

「くっ……平気だ！」

特筆すべきはボルトガンダムのタフネスさとパワー。通常時で、狂化したノーベルガンダムと同等の力を持つボルトガンダムは、今期の聖杯戦争随一のパワーを誇る。

「行くぞオオ！」

再び突っ込むシャイニングガンダム。

デンプシーロールをしながらボルトガンダムに突っ込んでいく。

「セイバー！直線を避けるなら、全体ならどうだ？！」

ボルトガンダムは自らを回転させ、グラビトン・ハンマーを真横

に振り回す。

「何？シャイニングショット！」

咄嗟に放たれた光弾がハンマーにヒットする。
ハンマーを手放すボルトガンダム。

「必……………」

「炸……………」

「そこまで！」

間桐雁夜の叫びが響き渡る。

双方のガンダムも拳を下げた。

「もう良いだろう。衛宮切嗣。時臣のブレイカーは君のセイバーに劣るものではない。」

「……………ああ、そうだな」

周囲が光輝き、ガンダムが消える。

「相変わらず、やるな。ブレイカー」

「お前もな、セイバー」

「では、これから宜しく頼もうか、衛宮」

「ああ、遠坂」

第十三話

「衛宮……切嗣だっけ？」

自分を呼ぶ声に切嗣は振り返った。

「君は……誰だい？」

「バーサーカーのマスターの桐沢琢磨だ。あんたに言いたい事がある」

切嗣は表情を改める。

「何かな？」

「俺が何で教会に呼び出されたかは知ってるな？」

切嗣は記憶を探る。

「確か結界を張らずに戦闘をしていたからだっただね」

「ああ……だがいねえんだよ」

「何？」

「この中に俺達を襲った奴等がいねえんだよ」

「何だと？」

「しかもバーサーカーによると、奴等はデビルガンダムと関係があるらしい。大将であるあんたに言っところと思っただけな」

「おい」

セイバーが声をかける。

「そいつらは、鳥の様なやつと、弾を撒き散らすデカブツ、それ

に口のでかいガンダムじゃなかったか？」

「ああ、だが何でそれを？」

「……昔やりあった。切嗣。どうやらデビルガンダムの手下が三
体現界してるみたいだぜ。」

「 デビルガンダムの手下が、三体」

「デビルガンダムの手下が……三体」

ウェイバーはポツリ、と呟いた。

どのような手合いなのか知らないが、厄介な事になりそうだ。

「不安かい？」

金沢が話しかける。

「ちょびつとな……」

全員で柳桐寺に向かう道中、ウェイバーは憂鬱だった。

柳桐寺とは、この冬木の地の霊脈である。

突如アサシンが霊体化を解いて現れた。

「何か来るぞ！」

その声の後に何かが現れた。

「あれは……」

「デスアーミー！」

ライダー達も霊体化を解く。

「もう一般人にも被害が？」

アーチャーが声をあげる。

人型をした半円状の頭とモノアイを持った、ガンダムとは違う機械の巨人。その登場にウェイバー達は驚愕した。

「俺が行く！」

セイバーが駆け出す。

セイバーの体が黄金の光を帯びていく。

明鏡止水

飛び上がったセイバーが背中を唐竹に降り下ろす。

デスアーミーはモノアイを境に、真っ二つに割れた。

「ふんっ……」

「見事だ、セイバー」

「いえ、それほどでもございません。師匠」

「そういえば、教会ではゴタゴタしておった様だが、あれをやるか」

「はい。演武ですね」

「行くぞ！流派！東方不敗は！」

「王者の風よ！」

「全新系列！」

「天破侠乱！」

「見よ！東方は！赤く燃えている！」

「（師匠、お久しゅうございます）」

「（やるようになりおったわ）」

「師匠、お久しゅうございます」

「ライダーで構わん。久しいなセイバー。……しかし、デスアーミーが現れたとなると、遂に一般人にも被害が出たか？」

「恐らくは。……ライダー」

ウェイバーの頭はウェイバーの思考の早さに追い付かなかった。あのデスアーミーを生身で倒したのもさることながら、セイバーの振るった剣は所々錆び付いていた。

真の達人は得物を選ばないというそれなのか？

ウェイバーはセイバーの実力に舌を巻いた。

「一般人に被害が出たとは、どういう事かな？セイバー」

遠坂時臣が口を開く。

「前にも言ったがデビルガンダムはデビルガンダム細胞を撒き散らす。これに感染した一般人は、デビルガンダムの言うことを聞くだけのゾンビ兵になるのだ」

アサシンが説明する。

「恐ろしい兵器だな」

間桐雁夜がそうこぼした。

「一刻も早く、デビルガンダムを止めなきゃいけない様だね」

衛宮切嗣がそう締めた。

「……！ どうやらまたお客様みたいだぜ」

衛宮切嗣の瞳は、宙を舞う一つの影を捉えた。

「皆散れ！」

セイバーが叫びをあげる。

虹色の足

先ほどまで切嗣達がいた場所は、斬撃で抉られたようになってい
る。

「あれは？」

桐沢琢磨が声をあげる。

ガンダムヘブンスソード

「衛宮切嗣」

「何だ？アーチャー」

「一刻も早くデビルガンダムを倒さなければいけない現在、ガン
ダムヘブンスソードに釘付けにされるのはよくありません」

「ああ」

「バーサーカー。そして桐沢琢磨。私と共に此処に残り、ヘブ
ンスソードを打倒してくれませんか？」

「……良いぜ。あの鳥野郎には借りがあるんだ。たっぷり遊んで

やるぜ。さつさと片付けて、セイバー達を追うか？バーサーカー」

「ええ、そうね」

「わかった。ガンダムへブズソードは君たちに任せよう」

第十四話

「く……」

ガンダムへブンスソードを仕留めるため、此処に残ったガンダムローズとノーベルガンダムは上空からの斬撃にさらされていた。
正確無比な飛ぶ斬撃は、確実にアーチャー達を衰退させている。

「ぐっ……なんとかならないアーチャー？」

「集中すれば可能ですが、こつも斬撃が続くと……」

「わかった……一発防ぐわ。だから隙を作って！」

「了解しました」

ガンダムローズは回避行動をやめ、集中する。

その隙にここぞとばかりに虹色の足を放つガンダムへブンスソ
ド。

その前にノーベルガンダムが立ちはだかる。

「ノーベルリボン！」

ノーベルリボン

ガンダムローズに迫る斬撃をノーベルリボンを振るい、弾いてい
く。

「これなら……　　ローゼスハリケーン！」

ローゼスハリケーン

最大出力のローゼスハリケーンがガンダムへブンスソードに放たれる。ローゼスハリケーンはガンダムへブンスソードを拘束することと成功した。

「もらった！ ノーベルフラフープ！」

ノーベルフラフープ

ノーベルフラフープは吸い込まれる様にガンダムへブンスソードに飛来していき、その右の翼を切断した。

真つ逆さまに落下する、ガンダムへブンスソード。それを待ち受ける者がいた。

ビームサーベルを持ったガンダムローズが落下予測地点に待ち受ける。

「終わりです！」

ガンダムローズのビームサーベルはガンダムへブンスソードの腹部を貫いた。

数瞬の間をおき、爆発するガンダムへブンスソード。

アーチャーとバーサーカーはガンダムを解いた。

「終わりましたね」

「うん、終わったわね」

「どうする、すぐ追つか？ 雁夜」

「いや、少し休もう、桐沢。魔力がなければ、行っても足手まといだ」

ガンダムヘブンスソードのいる方面から爆発音がした。切嗣は桐沢達の安否を窺う。

「 気配がする！」

セイバーが振り向く。

そこには巨体を誇る、グランドガンダムが立ち尽くしていた。

グラ ンド ガン ダム

「 導師」

「 ああ。ここは我々が受け持とう。衛宮。君達は先に進むが良い」
「 わかった。行くぞ」

綺礼は悠然と、戦うガンダム達を見つめていた。

二体のガンダム ヤマトガンダムとポルトガンダム

は、グランドガンダムの放つ濃密な弾幕の前で進撃出来ないでいた。

「 なんとか懐に入れない物でしょうか ? 導師」

「 あの弾幕では難しいな、綺礼」

「 もし懐に入れたなら私の全魔力を使い、奴を始末させます、導師。」

「 ならば私も出し惜しみは止めようか。やれやれ、二人ともデビルガンダム戦では戦力になれそうもないな? 綺礼」

「 仕方ありません。それほどの相手かと」

「 ブレイカー！ 魔力を好きに使って構わんから、ランサーに道を作れ！」

時臣が声を張り上げる。

「わかった。……用意は良いか？ランサー」

「直ぐにでも行ける。ブレイカー」

ボルトガンダムの機体が黄金に輝いていく。

明鏡止水

「炸裂・ガイアクラッシャー！」

炸裂・ガイアクラッシャー

ボルトガンダムは地面に拳を撃ち込む。

地面が隆起し、グランドガンダムをのけぞらせる。

それを受け、神速で駆けていくヤマトガンダム。そのコクピットは黄金に輝いている。

「超級霸王日輪弾！」

超級霸王日輪弾

灼熱のエネルギーがグランドガンダムを穿ち、焼きつくしていく。気を根こそぎ込めたそれは、グランドガンダムを焼失させる事に成功した。

「終わりましたね導師」

「ああ、だが魔力を使い果たしてしまった」

「休みましょう。今の我々が行っても何もできません」

第十五話

衛宮切嗣は再び振り返った。

「皆……僕らを行かせるために……！」

「今は先を急ぐぞ。切嗣」

「ああ」

「……！ まだ大物が残っているらしいな」

アサシンが呟く。

「あれは……ウォルターガンダム！」

巨体を見せつけるかの様にウォルターガンダムが立っている。

「ウェイバー君」

「うん」

「衛宮。ここは僕達が受け持つ。先に行け」

「わかった」

切嗣達は駆けていった。

「ぐっ！」

ウォルターガンダムと戦うガンダムシュピーゲルのコクピットの中、アサシンは思わず呻いた。

ウォルターガンダム、中距離はビーム砲。近距離では牙と隙がな

い。

一度クーロンガンダムが懐に入ったが、牙で追い払われた。

「アサシン！ここは連携と行くかあつ！」

「その様だな！ライダー！」

クーロンガンダムが金沢の方に向き直る。

「本気で行く！宝具を更新せいつ！」

「更新？」

「一番下に頂があるはずじゃ。それをやれいつ！」

「わかった！」

金沢は魔力を集中する。

「アサシン。一撃で仕留める。隙を作るのだ！」

「わかった！」

「宝具更新！」

クーロンガンダムを驚異的な量の魔力が包み込む。次いでハート型の紋章。キングオブハートの証が現れ、光を放つ。

クーロンガンダムは紫の光に包まれ、新たな姿を現した。

マスターガンダム

漆黒のガンダムが降臨した。

「来い！風雲再起！」

マスターガンダムの言葉と共に白い馬型の機械が現れる。

マスターガンダムは風雲再起に騎乗した。

「せいやっ！」

ガンダムシユピーゲルはメッサーグランツ　爆弾を仕込んだ苦無　を投げつける。

それらはウォルターガンダムに当たり、時間差で爆発を起こした。

「はいやー！」

その隙にライダーが駆ける。

一瞬で間合いを詰め、ウォルターガンダムに向き直った。

「せきはてんきょっけん
石破天驚拳！」

石破 天 驚 拳

ライダーから放たれた、拳の形をした気は、正確にウォルターガンダムにヒットし、その巨体を破壊し尽くした。

「終わった様だね」

「そうだね」

ライダーとアサシンはそれぞれ、ガンダムを解く。

騎乗したライダー。

あれが真の姿かとウェイバーは考えた。

「ウェイバー君魔力は？」

「もう残って無い」

「僕もさ」

二人して地面に腰をおろす。

「後は任せよう」

「うん」

「衛宮に」

三度した爆発音に切嗣は振り替えることは無かった。
今はただ、進むが使命。

黙って駆け続ける。

走ってる内に柳桐寺が見えてきた。

柳桐寺は異常な魔力に包まれている。

「遂に辿り着いたな」

「ああ」

「行くぞセイバー」

「ああ、切嗣」

そうして、石造りの階段を駆け上がったその時。切嗣は見つけた。
己の妻、アイリを。

堂々たる巨体を見せつけるデビルガンダムの肩にいるアイリスフ
イルの姿を。

「アイリ！アイリイイイ！」

「アハハハハハハ……アハハハハハハハハハハハハ！」

「何がおかしい？何がおかしい？！アイリッ！？」

「落ち着け！切嗣！」

セイバーが切嗣の肩を掴む。

「アイリはデビルガンダム細胞にやられているだけだ。今ならまだ、このキングオブハートの紋章で治療出来る！」

「そうか……」

いくばくか落ち着きを取り戻す、切嗣。

「……何だ？この気配は？」

セイバーが呟くのと、闇から影が躍り出るのは同じだった。

「あれは？」

セイバーが叫ぶ。

「ドラゴンガンダム！」

第十六話

「ドラゴンガンダム!? 何故お前が?」

「いや、待てセイバー。そいつはサーヴァントじゃない!」

「何?」

「ステータスが見えない。……仮説だが、こいつはデビルガンダムが聖杯から情報をダウンロードして、デビルガンダム細胞で作り上げた模造品だ!」

「模造品?」

セイバーはドラゴンガンダムを見やる。細部までそっくりだ。

「気をつける! 一体とは限らない!」

「あ、ああ……」

「ガンダムを出そう!」

「わかった。出るオオオオ! シャイニングガンダアアアム!」

セイバーの右手のキングオブハートの紋章が発光。セイバーを包み込み、球体化。宙に浮かび、輝きと共にシャイニングガンダムを降臨させた。

鎧武者然とした、デザインのシャイニングガンダムは、デビルガンダムとドラゴンガンダムの模造品を見る。

「……気配? そこだ!」

物陰にバルカンを放つ。

暗闇からドラゴンガンダムの模造品がもう一体が飛び出した。

「二体か……」

どうやら、現在のデビルガンダムでは二体作り出すのが限界の様だ。

充分驚異だが。

「三対一か……」

セイバーが呟くのと、ドラゴンガンダムの模造品が爆発するのは同じだった。

ハイパーゴッドガンダム

「間に合ったようじゃの」

赤い巨大なビームサーベルを構えたガンダムが降臨していた。

「ご無事ですか？」

「……ああ、お前は？」

謎のガンダムからの声に戸惑いながら返答するセイバー。

「やはり、ご存じ無いのですね。私は前セイバー。あなたの未来の弟子です」

「弟子？俺の？」

困惑するセイバー。

困惑しているのは切嗣も同じだった。

「あなたは？」

切嗣は老人に問いかける。

「わしの名は間桐臓蔵。前回のマスターじゃ。言峰璃正の連絡を受けてやって来たが、ちょうどよかったの」

「前回の……」

「師匠。ドラゴンガンダムの模造品はお任せください。師匠はデビルガンダムを」

「ああ。切嗣！」

「わかった！」

切嗣はデビルガンダムに向き直った。

「ドラゴンガンダム……遠慮なく行きます」

ハイパーゴッドガンダムは手に持ったサーベルに気を込める。

「ハイパーゴッドフィンガーソード！」

ハイパーゴッドフィンガーソード

真っ赤なビームサーベルを構え、ハイパーゴッドガンダムはドラゴンガンダムの模造品を見据える。

ドラゴンガンダムの模造品が先に仕掛けてきた。

両手を伸ばし攻撃してくる。

それを避けるハイパーゴッドガンダム。

「胴オオオオオオ！」

ハイパーゴッドフィンガーソードを一閃する。

その驚異的な範囲に物を言わせ、ドラゴンガンダムの模造品を一

刀両断した。

「切嗣！生体ユニットになっているアイリをなんとかしろ！気絶させておけば、後で俺が治す！」

「どうにかって？どうすればいい？」

「手加減してのせ。それが無理なら」

「無理なら？」

「説得しろ」

「説得？」

思わず聞き返す切嗣。

「この段階ならデビルガンダム細胞は完全に洗脳していないはずだ。お前の心からの言葉ならきつと届く」

頷く切嗣。

「よし。行イイクぞオオオ！」

シャイニングガンダムがデビルガンダムに突貫した。

デビルガンダムはバルカンを撃ち放つ。特大サイズのそれは一撃で致命傷になりかねない。

「まず分断する！その後なんとかしろ！」

「わかった！」

「行くぞ……デビルガンダム！」

シャイニングガンダムの腕部アームカバーが点火し、解放。次い

で肩のエネルギーフィールドジェネレーターが展開。足部レッグカ
バーを解放し、シユートブースターを展開する。

頭部のフェイスカバー、頭頂部のフィールドドリダクションフィン
及び側面のリトラクタブルタクトが展開し、頭部の冷却を開始。
シャイニングガンダムの機体が黄金の輝きに包まれていく。

明 鏡 止 水

「 キングオブハート・シャイニングフィンガー！」

一気に懐に潜り込み、シャイニングフィンガーを撃ち放つ。
デビルガンダムの体から爆発が上がり、全体が炎に包まれた。

「 今だ！」

驚異的なスピードで、デビルガンダムの肩からアイリをさらう切
嗣。

生体ユニットを抜かれたことで、デビルガンダムの動きが目に見
えて鈍った。

「 アイリ！……くっくっ」

魔術を放ち抵抗するアイリ。元々アイリはアインツベルンの代表
に恥じぬ腕を持っている。

手加減して無力化出来る相手ではなかった。

「 くっく……説得するしかないか」

切嗣は覚悟を決めた。

第十七話

「……アイリ、覚えているかな？僕の信念を。大を生かすためなら小を迷わず切り捨てる。それが僕の正義だつて。でもアイリ。今は違う。君を失って初めてわかった。僕はどんな大を犠牲にしても守りたい小《家族》を見つけた！イリヤの為にも戻って来てくれっ！アイリ！」

「切……嗣……イリ……ヤ……」

アイリの行動が止まる。

「（今だ！）はあっ！」

アイリの首筋に当て身を当てる切嗣。
アイリはガツクリ、と意識を手放した。

「　　良いぞ！セイバー！」

「切嗣。宝具を更新しろ！」

「更新？一番下のこれか？」

「それだ！」

「わかった。宝具更新！」

シャイニングガンダムの機体が発光。キングオブハートの紋章が現れ、光がシャイニングガンダムを包んでいく。

ゴッ ド ガンダム

丸みを帯びた、流線型のライン。六枚の羽。

機神が降臨した。

「デビルガンダム……けりをつけるぞ！」

デビルガンダムが雄叫びをあげる。デビルガンダムから何かが一
つ射出された。

「石破天驚拳！」

石 破 天 驚 拳

ゴッドガンダムの羽が展開し、日輪を形成。練り上げた気を拳の
形で放出する。鮮やかな光と共に放たれたそれは、デビルガンダム
を残らず焼き払った。

「終わったのか？」

「嫌、最後にデビルガンダムが射出した物が気になるのぉ」

「ですが一応倒しました。デビルガンダムは当分動きをとれない
でしょう」

「そうだな」

「セイバー。アイリを頼む」
「わかった」

セイバーが右手の紋章をかざす。紋章が仄かに発光し、アイリの
表情から苦しみが消えた。

「……帰ろう」

ウェイバー達は、教会の一室で、待機されていた。切嗣達に拾われたあと、教会にやって来て待つように言われたのは記憶に新しい。

ようやく切嗣達が現れた。そばには見たことも無い老人と青年がいる。しかも青年はサーヴァントだ。

「間桐さんは間に合ったようですね。では全員揃った所で、衛宮さん。結果報告をお願い致します」

言峰璃正が切嗣に報告を促す。

「僕達はデビルガンダムの撃退に成功。だが最後にデビルガンダムが二つ何かを射出した。それが何かは不明だ」

「一応撃退したのか……」

ウェイバーは思わず呟く。

「お爺様？何故こちらに、それに前セイバーも……」

間桐雁夜が口を開く。

「雁夜よ。わしが二度の大戦と、月に何度か留守にしていたのは知っているな？」

「はい」

「二度の大戦や紛争でわしは前セイバーの現界分の魔力をかき集めたのだ」

「なるほど」

「とりあえず、デビルガンダムの成功した以上、今回のデビルガンダム討伐命令はある程度達成されました。射出された二つについては、我々が調査しますので、今回はデビルガンダムの件は保留と

言うことで」

言峰璃正が言葉を繋いでいく。

「こちらから連絡があるまで、各自、自由行動と言うことで。戦闘行為はなるべく控えてください。それでは解散とします」

言峰璃正の声を合図に去って行くマスター達。

最後に切嗣と金沢が残った。金沢は切嗣にメモを渡す。

「明日の朝七時にこの場所だ。忘れるなよ衛宮」

「ああ……」

最後に切嗣とセイバーが残った。

「セイバー、アイリの調子はどうだ？」

「良いぜ。朝までぐっすりだな」

「そうか。帰ろう」

セイバー達は屋敷に帰って行った。

金沢はライダーと二人、街を歩いていた。その頭の中には衛宮への復讐の事しか無い。

「マスター。本当に明日やるのだな？」

「……僕はウェイバー君とは違う。もう後戻りは出来ないし、復讐に殉じる覚悟もある。止めるなライダー」

「そうか、ならばもう何も言つまい」

金沢の頭は一杯だった。衛宮への事で、故に気付くことが出来なかった。自分に迫るデビルガンダムが存在に。

「何！」

突如金沢をワイヤーの様な物が縛った。

いまわのデビルガンダムが射出した物の一つ。デビルガンダムのコア部分が金沢に襲いかかった。

「マスター！」

ライダーは布を振るい、ワイヤーを裂いていく。が、追い付かない。

「（いかんこのままではわしも取り込まれる）はあっ！」

懸命にワイヤーを払うライダー。

だがその姿を見て、金沢は己の最後を悟った。まだ衛宮とも、決着をつけてないのに。

衛宮？

「ライ……ダー」

「何だ？」

「令呪を……持って命ずる。単独行動……し、この事を教会に……

……伝え別のマスターの元僕を止……める！」

「マスター……。心得た！」

ライダーは一目散に教会へ向けて駆けて行った。

第十八話（前書き）

前セイバーとランサーの性格はオリジナルです。

第十八話

「ここは……?」

「目が覚めたのかい? アイリ」

純和風の武家屋敷の一室。アイリスフィールは目を覚ました。

「切嗣? ……セイバー? 一体何が?」

「落ち着いて聞いてくれ」

切嗣は全てを語った。アイリスフィールが暴走した聖杯、デビルガンダムに取り込まれた事。そのために聖杯戦争を一旦、聖杯戦争を中止し、全マスターを集めたこと。激闘の末、デビルガンダムは謎を残しつつ倒した事。

「……そんなことが……」

余りのことに声も出ないアイリ。

「まだ無理をしない方が良く。セイバー、アイリを見ててくれ。僕は食事を作ってくる」

そう言って切嗣は部屋を後にした。

「セイバー……あなたにも迷惑をかけてしまったわね……」

「なに、気にする事はない。マスターの為に戦うのが、サーヴァントだからな」

そう言ってセイバーは笑う。

「ありがとう」

「……ん？」

部屋の扉を開け、切嗣が入って来た。手には器を持っている。

「出来合いの物だけど、お粥を作ったんだ。食べれるかい？アイリ」

「ありがとう切嗣」

お粥を見て顔を綻ばすアイリスフィール。

彼女はお粥を食べ始めた。

「美味しいわ」

「良かった」

その夫婦のやり取りを、セイバーは微笑ましそうに眺めている。

時計をチエックする切嗣。

デビルガンダム戦から一夜あけた早朝。金沢との対決は迫っていた。

「アイリ……」

切嗣が口を開くのと、花火があがるのは同時だった。

ウェイバーは思案にくれていた。

衛宮に用があるから、と自分を先に廃工場に帰した金沢が、いつまでたっても帰って来ない。

「……何かあったのかな？」

目が覚めたら、居るだろうと思いい、眠りについたが帰って来ない。

「ライダーがいるのだ。ある程度は大丈夫だと思うが」

アサシンが呟く。

そんなウェイバー達の瞳に、火花が目についた。

「結論から申し上げると、金沢勇二がデビルガンダムの生体ユニットとして取り込まれ、ライダーを放棄しました」

言峰璃正の言葉に辺りはざわめきに包まれた。

「あのライダーのマスターが……」

遠坂時臣は静かに呟いた。

「現在、デビルガンダムを教会の使い魔が搜索中です」

「一つ良いか？」

ライダーが口を開いた。

「わしはマスターに単独行動を命じられ、ここに来たが、わしの単独行動にも限界がある。誰か新しいマスターの心当たりはないか？」

「それなら……僕に心当たりがある。」

切嗣はライダーに声をかけた。

「ライダー。家に来てくれ」

「私をマスターに？」

アイリスフィールはいささか呆けた声を出した。

「駄目かな？アイリ？君は魔術師としては一流だと思うけど」

「私は……」

「わしからも頼む。前マスターの無念を晴らすため、わしに協力してはくれないか？」

「……わかりました」

ここに新たなマスターとサーヴァントが誕生した。

切嗣はタバコに火をつけた。

アイリスフィールの契約の儀式はつつがなくすんだ。

現在はライダー共々待機している。

自分もすることがなく、こうして紫煙を燻らせている。

切嗣は暫しの平穏を楽しんだ。

衛宮家の平穩は、ある人物達の来訪で終わった。

「遠坂に言峰綺礼？」

「お邪魔するよ。」

そう言っ て門をくぐる遠坂時臣。後に綺礼も続く。

「何の用かな？」

「何、綺礼が用が有るらしくてね。私は付き添いだよ。」

「では、言峰。何の用かな？」

切嗣が問いかける。

「ああ、衛宮切嗣。私と戦ってくれないか？」

第十九話

突然の願いは切嗣達を驚かせた。

「な……」

「何を言ってるんだ。綺礼？」

「導師。私は幼い頃から天才と呼ばれてきました。真実そうなのでしょう。今まで誰も私を理解してくれなかった。導師でさえも」

「綺礼……」

「だが、私はこの聖杯戦争で感じました。この行事なら私を満たしてくれるかも知れない。家庭を持ってすら満足出来なかった、自分を満足させてくれるかもしれない。そのためには、拳を交えるしかない。短い間だったがあの時の戦いで私は確信した。その相手はお前だと。今一度言おう、衛宮切嗣。あの倉庫街での続きをしよう」

「僕は……」

切嗣は口をパクパク、とさせている。

いささか、突然過ぎたか？

「良いぜ」

「セイバー」

「武道家が拳を交えたいと、言ってるんだ。受けてたってやる」

「セイバー……」

暫し黙する、切嗣。

「良いだろう。勝負だ」

庭に二人のサーヴァントが対している。セイバーとランサー。二人は同時に声をあげた。

「出るオオツ！ガンダアアム！」

「来い！ガンダム！」

一つの機神が降臨する。

ゴツドガンダム

輝きと共に一人の機械の巨人が現れた。

ヤマトガンダム

巨人達はにらみ合う。

「……行くぞ」

「ああ」

二体同時に地を蹴った。

取っ組み合うゴツドガンダムとヤマトガンダム。

二体の力は拮抗していた。

同じタイミングでミドルキックを放つ二体。

お互いにのけぞる。

「くっ……バアルカン！」

頭部のバルカンを放つ、ゴツドガンダム。

「ふん！」

ヤマトガンダムは右手から布を振るい、かき消した。

言峰綺礼は興奮していた。

思い返してみるに、今まで人生の中で何かに熱中したことはない。だが、今は緊迫感に包まれている。

初めての熱中。

綺礼は人生の答えにたどり着こうとしていた。

布を斜めに振るう、ヤマトガンダム。ゴッドガンダムはビームサーベルを抜く事でそれを受けた。

何時かの様に拮抗する二体。同時に獲物が弾かれた。

「爆熱・ゴッドフィンガー！」

爆熱・ゴッドフィンガー

「灼熱・サンシャインフィンガー！」

灼熱・サンシャインフィンガー

バチバチ、と火花を散らしながら、力を込めあう二体。

「……張れ。頑張れランサー！」

綺礼は声を張り上げる。

「……う……ウオオオオオオ！」

更に力を込める、ヤマトガンダム。
二体の右手は拮抗の果て、爆発した。
直ぐに魔力をすいとり再生する。

「……石破天驚拳！」

石破天驚拳

「……超級霸王日輪弾！」

超級霸王日輪弾

二体の放った気は辺りを鮮やかな光で満たし、やがてヤマトガンダムは光に包まれていった。

「（ああ……衛宮切嗣。私は幼い頃から理解者もなく、また人を理解したこともなかった。だが、お前と拳を交えてわかった。

心の孤独。私は友人が欲しかったのだな）」

「……はっ！」

綺礼はガバ、と飛び起きた。
自分は……一体？

「気付いたか？」

「衛宮。導師」

綺礼は先ほどの出来事を振り替える。自分は……。

「負けたのだな……」

「良いファイトだった」

「良い試合だったぞ。マスター」

セイバーとランサーがそれぞれ話しかける。

「彼らの言う通り良い戦いだった。満足させられたかな？言峰」

「ああ」

「良かった」

「切嗣。」

「ん？」

「私と友人になってくれないか？」

「もちろん。綺礼」

第二十話

アイリスフィールの目に、魔力で出来た花火が目についた。綺礼とのファイトを終えた切嗣達は四人で食卓を囲んでいた。出来合いの物を並べただけだが、まあまあ見栄えする。

アイリスフィールは切嗣達に告げた。

「収集の花火か……食事をとってる場合じゃなさそうだね」

「行くか、切嗣」

「ああ。綺礼」

八人は教会へ向けて歩を向けた。

教会には既に全てのマスターと間桐臓腑が揃っていた。全員の頭にあるのはデビルガンダム。その行方のみである。

「デビルガンダムを発見しました。現在監視中です」

「場所は何処に？」

「新都にある冬木市民会館です」

「新都……」

新都の冬木市民会館。それはこの地にある三つの霊脈が加工を受けたことにより、新たに生まれた霊地。

「そこにデビルガンダムと金沢が……」

「行きましょう」

前セイバーが口を開く。

「おお。行くぞ、切嗣」

「ああ」

「……セイバー。ここが正念場ぞ」

冬木市民会館。そこには異常な雰囲気立ち込めていた。

デビルガンダム。

諸悪の根元がここにいる。

「皆……行こう！」

切嗣が宣言するように叫ぶ。

「『ガンダアアム！』」

輝きと共に八体のガンダムが降臨した。

ガラガラ、と冬木市民会館を壊し、デビルガンダムが現れる。

最後の戦いの火蓋が切って落とされた。

デビルガンダムはバルカンを撃ちまくってくる。一撃貫えば致命傷なそれをガンダム達は避けていく。

「衛宮よ」

「何ですか？ 間桐さん」

「わしらで道を作る。行け」

「 わかった。セイバー！聞こえたな？」

「 ああ！」

「 先ずはデビルガンダムの動きを止めます。セイバー！」

アーチャーが叫ぶ。

「 よし！俺のこの手が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！

爆熱・ゴッドフィンガー！」

「 ローゼスハリケーン！」

爆熱・ゴッドフィンガー
ローゼスハリケーン

真っ赤な火球と薔薇がデビルガンダムに向かい飛んでいく。それはデビルガンダムにピットし、動きを鈍らせた。

「 ー！」

ガンダムヘッドがゴッドガンダムに向かい襲いかかってくる。

「 バーサーカー！」

「 了解！」

「 ー」
ダブルガンダムタイフーン！」

ダブルガンダムタイフーン

二体のガンダムはそれぞれ、サーベルとリボンを回転させエネルギーの奔流を作って行く。ガンダムヘッドは全て打ち消された。

「 セイバー！」

ランサーが叫ぶ。

「『 超級霸王日輪弾！』」

超 級 霸 王 日 輪 弾

目も眩む光の奔流がデビルガンダムを襲う。デビルガンダムに直撃した。

「道を作る！セイバー！アサシン！」

ブレイカーが声を張り上げる。

「ああ！」

「おお！」

「『 トリプルガイアクラッシュャー！』」

三つの拳が地面に打ち込まれ、地面が隆起していく。ゴッドガンダムは出来た道へブーストを吹かす。

「師匠！」

「ああ！」

「ハイパーゴッドフィンガーソード！胴オ！」

「爆熱・ゴッドスラッシュ！」

一組の斬撃がデビルガンダムを抉る。コクピットがあらわになった。

「……………金沢勇二！」

コクピットの中で、金沢は全身をケーブルに包まれていた。それはデビルガンダムに完全に取り込まれており、救出は不可能だと示している。

「行くぞセイバー！」

「はiiiiiiiiiiii！」

「……………究極・石破天驚拳！」

二体のガンダムから放たれた、気は正確にデビルガンダムのコクピットをとらえ、飲み込んだ。

「……………終わったのか？」

切嗣は呆然と呟いた。

「おい、あれを見る！」

デビルガンダムがいた場所に、何かが浮かんでいる。それは正しく聖杯だった。

だが。

「汚れておるの……………」

臓腑は呟く。

聖杯は未だデビルガンダムの影響が残っていた。

無色だった力に、今は悪と言う方向性が加わっている。

「どどどするんだ？」

雁夜は口を開く。

「……聖杯を清めよう」

最終話

「清める？」

「ああ。聖杯に願い、聖杯を清める」

切嗣は振り替える。

「皆には悪いが、この聖杯では録に願いを叶えられない。せめて次は叶えられる様に清めるしかないと思うんだ」

「私は構わん」

綺礼は口を開く。

「元より聖杯に託す願いはない。汚れているのなら尚更だ」

「私も同意見だ」

時臣は呟く。

「俺は師匠に武者修行してこいと言われただけだから……」

「私にもないわ」

桐沢とアイリスフィールも同様の様だ。

「間桐の悲願。今回は見送るしか無さそうですね、お爺様」

「そうじゃのお」

間桐達も答えは出ている。

一同を見回し、頷く切嗣。

「聖杯よ！聖杯を清めたまえ！」

聖杯が光輝く。辺りを光が満たしていく。切嗣は光に包まれて…。

雪に包まれた城。アインツベルンの本拠地に一つの影があった。

「今期の聖杯は清められました。次期からはつつがなく聖杯戦争を執り行えるでしょう」

「良くやってくれた。衛宮切嗣」

切嗣に対し、老人

アハト翁

は呟く。

「何か望みはあるかね？」

「……では。アイリスフィールとイリヤスフィールを」

「衛宮切嗣。その二人は……」

「私は、魔術師を引退します」

「！」

「私は一人の家族の味方になりたいのです」

「……良いだろう。ただし、条件がある」

「次回のアインツベルン代表を全力でサポートする事か……」

「まあ、良いじゃないの、切嗣」

アイリスフィールは呟いた。

「次回に、全力で勝たしてあげれば」
「そうだね……」

縁側に二つの影が見える。

「切嗣は昔、正義の味方だったの？」

小さな影

イリヤスフィール

は問いかける。

「うん。でもね、正義の味方には期限があつてね。僕はもうやめちゃったんだ」

「良かったの？」

「うん。……ねえイリヤ。大か少。どちらかしか助けられないとき、イリヤならどっちを助ける？」

「……大しかないんじゃない」

「そうだね。でもね、本当の正義の味方なら、大も小も、そしてそんな問題で悩む、自分自身も救って見せる。そんなものだと思うんだ」

「うーん」

「ねえイリヤ。君は正義の味方にはならなくていい。だけど家族の味方にはなってくれないか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7737n/>

機動武闘伝GFate

2010年11月29日02時48分発行